平成２年４月20日

郷土あれこれ

郷土館だより
第 29 号

五日市町立
発行　五日市町郷土館　東京都西多摩郡五日市町五日市920-1　電話0425-96-4069

終戦直後の文化運動

― 五日市のある青春 ―

日本作家協会会員
西野寿二（ひさ）

《地球座》の第一回公演“青春”の一場面

1　はじめに

昭和20年８月15日の終戦―無条件降伏―は従来の価値観を一変させた。天皇のご真影奉安殿は破壊され、小学生は教科書に墨を塗り、教師も警察官も板につかぬ民主主義学習にとまどい、町内の世話役連も伝統的権威の喪失に息をひそめた。日々の食料難、物資不足が混乱に拍車をかけた。混乱と自信喪失の中で敗戦を軍国主義・超国家主義からの解放と受けとめ、新時代の到来を歓喜と希望を以て迎えた人々もいた。

五日市の場合、インテリ系の疎開者が多く、新町民として定着するもの、都内のきびしい住宅事情から、とりあえず五日市に留り、都心へ通勤するもの等種々あったが、彼らが地域の戦後文化運動の核になったことは争えない。本稿の執筆者西野氏は、終戦直後の文化団体《新農村文化会》の構想は五日市線通勤者の常連が列車の中で花咲かせたものと言っておられる。価値観の転換、権力の空白が新しい文化運動を誘発するという点で、明治10年代の自由民権期を連想させる。深沢権八の孫深沢一彦氏が指導者の１人として活躍されたのも因縁を感ずる。西野寿二氏は『空海』等の大著をもち、近年は悠々自適のうちに万葉研究者として数々の著作を発表されておられるが、終戦時は新文化運動の理論的指導者として青春の血を湧かせた方である。《新農村文化会》の設立趣意書（注１）ならびに政治結社《五日市新政会》の設立趣意書も同氏の書かれたものである。なお、本稿の五日市は増戸・戸倉・小宮を含まない旧五日市地区をさす。（石井記）

1.「新農村文化会」の発足

私（西野）がこれから述べる時代は、敗戦時から凡そ２か年、昭和22年頃迄の出来事で『五日市町史』（1976出版）にも載っていない。戦後末期焼野原となった東京から疎開してきた人達は、いずこも同じ物置同然の小屋や土蔵の片隅を住居として細々と暮らしていたのである。米の配給はとぎれ勝ち、帯一筋が闇米一升、そんな時代であった。私が東京から五日市へ来たのは昭和19年で小学校時代の遊び仲間小曾根一雄さんが、料亭《秋川亭》の女主人の甥に当って居り、たまたま私の妻が五日市小学校に転勤したためでもあった。

私は五日市から早稲田（当時早稲田大学の事務局勤務）まで片道二時間の通勤となったが、敗戦の年、20年４月からは大学の紹介で青梅の農林学校の英語教師として勤めるようになった。しかし、その６月には24時間召集とかで、生徒や同僚達にサヨナラをいう暇もない出征で、帰ってきたのは９月。いずれにしても私たちは当時の言葉でいう疎開者であった。学校へ行くにもバスはなく、通勤は汽車、それも燃料は石炭ではなかったから、時々蒸気あげということで、途中20分ほども立往生する始末であった。しかし東京通いの仲間がお互いに席をとってくれたり、とってあげたりした。しまいにはあそこは誰それさんの定席ということで、向いあって掛ける両側８人ほどの席が私たちのためにあけられていた。通勤の仲間には『日本週報』の編集長上田博さん（注２）（兄の茂氏が読売新聞販売所長をしていた縁故で五日市へ来られたのだろう）書家の金井健翁さん（数年前死去）徳蔵寺の山岸さん。五日市憲法で有名となった深沢家の長男一彦さん。都信連の師岡正孝さん等がいた。一彦氏は私の大学の先輩で、後立川短大学長になられた。（父君誠一氏は昭和24～26年五日市町長）会の事務所は歯科医の犬養謙さん宅で、彼は犬養木堂の甥で、岡山県日比町の出身ときいていたが、よく私の家へやって来られ、それも玄関からでなく、書斎の窓を跨いでという変わった訪問であった。郵便局長の奥秋さん（後に不慮の死をとげられた）自転車屋（後に玩具屋）の橋本延次さん、朝日新聞の販売所長の渡辺さん。その他多士済々。当時若かった人達を除いて殆どが今は故人となってしまったが、私たちは何かで集まると、灰燼に帰した大都市に代って、今度は生き残った農村から新しい文化を起こさねばならぬと、皆で寄って《新農村文化会》というものを作ったのである。

〔注１〕この趣意書は敗戦後の日本社会の復興、とくにその精神的復興を「外から」（外国）でも「上から」（政府諸団体等）でもなく、民衆自身の自覚によって行おう。その為農村社会の文化水準を高め、住民の知性、批判力を高めなければならない、と強く主張している。戦前戦中の農村社会は個性の強い批判力をもつ個人の生存し得ない場所であった。その農村に個の種を蒔こうというのが西野氏らのねらいであったと推察される。

〔注２〕『日本週報』は週刊誌が洪水のように出まわる以前の、数少ない週刊出版物として指導性を発揮していた。編集長の上田博さんは背の高い好男子で、衣料事情の極度に悪い当時、ダブルの背広姿で颯爽と通勤し、“文化人”の典型として衆目を浴びた。（石井記）

新農村文化會設立趣意書

我々は現在廃墟の上に立つてゐる。都市も農村も價値なき社會となつてゐる。

政治、經濟、文藝、科學等あらゆる部面にわたつて、我々は混亂と混沌のうちにさまよつてゐる。口では民主主義を唱へてはゐるが、利己的な自由放任主義だけを知り自己の權利の主張だけを知つて、それに對する責任の重要さを知ないもの、社會内の個人だといふ觀念を忘れ公德も人類愛をも全く忘れたかの如き人々の激增してゐる、このやうな諸事象は要するに無價値な、言ひかへれば荒廢せる社會がその根抵に横たわつてゐるからである。

しかしながら他方においてかゝる悲慘なる現實に對して、同時にまたこの現實を打破つて我々の正しく生くる道即ち、雜草繁茂せる社會を耕して價値ある植物を生成させることの出來る豐よくなる社會を建設しやうとする力が存在してゐることも現實である。この方向は敗戰以來國際的民主主義的力を背景とした「外からの」乃至「上からの」力によつて押し進められてきたが、專制的軍國主義封建的國家主義が破壞されてゆくにしたがつて民衆のかくせいとなつて「下からの力」として補足的に行はれてゐる。しかしこの力は單に補足的なものだけで足るだらうか、否、それが充實的な主体的な力として作用しない限りは日本社會が價値づけ得られることは絶對に出來ない。日本社會の價値付は一般民衆の自覺に懸つてゐる、ここに農村に於ける一般民衆のかくせいが先第一に必要要件である。およそ近代社會の發展はいづれの國においても農村社會のふるき諸体制の改革即ち、農村社會の文化の向上によつて行はれてゐると言つても過言ではない。わが國においては農村社會を近代化することを得なかつたといふ点に軍國主義的封建的諸勢力が侵入し、生成する餘地が殘され遂に敗戰の苦しみを味わなければならぬ一因があつたと言へる。しからば農村社會の價値付は如何にしたら出來、また誰によつて行はれるか、それは言ふ迄もなく農村民衆ここに農村青壯年の自覺により青壯年自休によつて行はれねばならない。しかし現在われら青壯年のすべてがそれにかくせいしてゐるか、またかくせいしてゐるとしても實行の土台となるべき知識をもつてゐるであらうか、われ／＼はそれに對して疑をもつものである。したがつて農村の青壯年はまづ第一にその使命の重大さを意識すると同時に、正しき新しき農村社會を建設するために必要な知性に基く健全な批判力をやしなひ、それを實行の土台にしなければならない。それは日本社會に現存する二つの現實を正しく充分に理解することによつて始めて與へられるものである。これによつて農村社會は健全な歩みをすることができひいてはそれによつて平和日本國家の再出發もなされ全人類の福祉も與へられるものである。これが本會目的であり趣意である。

志を同じくする方々は奮つて御參加あらんことを希望する。

昭和22年２月25日《地球座》第１回公演、五日市劇場。１列目左より西野寿二・上田博・深沢一彦・犬養謙・奥秋一郎。２列目、渡辺・宮嶋好男・上田茂・小峰森太郎中島美智子。３列目、岡崎芳雄・宮内・鈴木・舘野光太郎。４列目、菱沼武雄・青木敬太郎・上田誠・高水正一衣笠多瑞子。(敬称略)

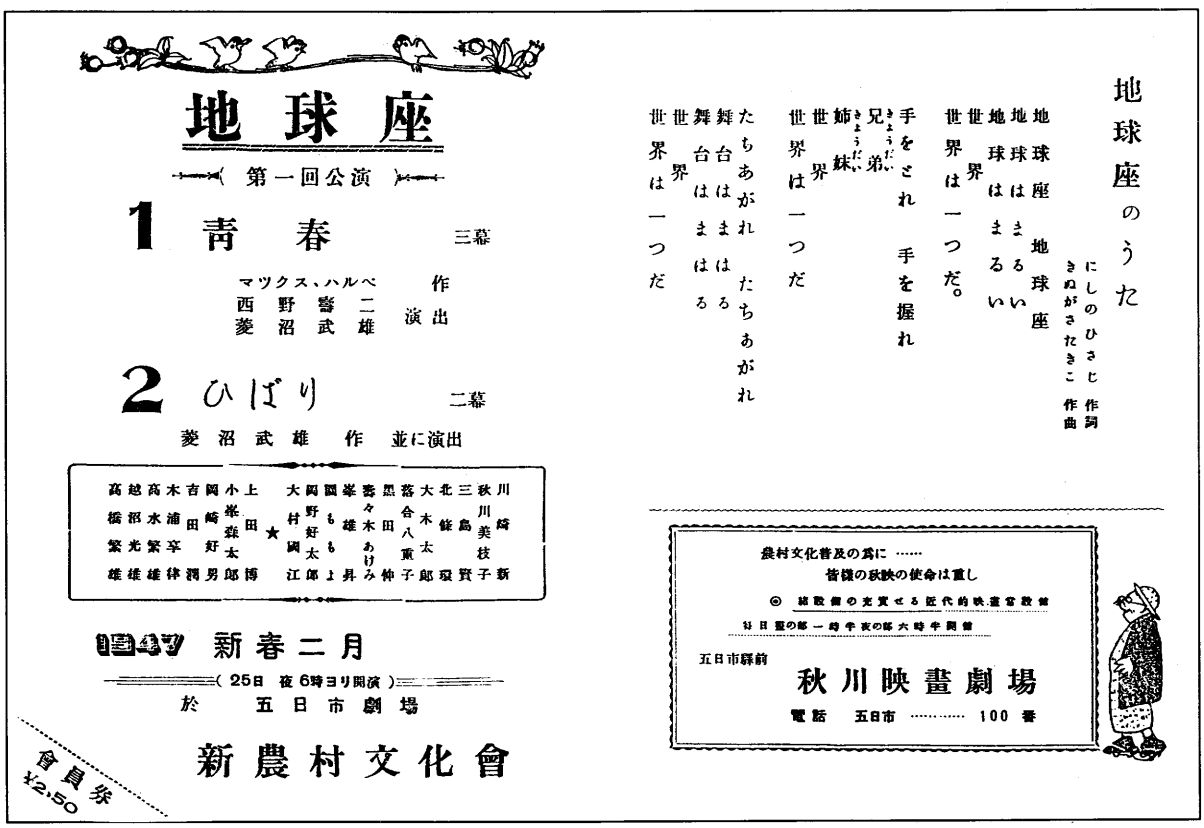
2.「地球座」の旗上げ

新農村文化会の具体的な活動としては音楽、文学、演劇の各部を設けた。あきがわ書房の小峰森太郎、衣笠多瑞子、宮嶋好男、青木敬太郎、中島美智子、宮内（小学校教員）菱沼辰雄、私市八重子、館野光太郎、岡崎芳雄、木浦亨律、吉田潤（写真家）氏等、数えきれない若者達が協力してくれた。文学部では『多摩文学』という雑誌を二号まで出し、演劇部ではシエクスピアのグローブシアターにちなんで《地球座》と名付け、そのための歌詞を私（西野）が書き、衣笠さんが作曲してくれた。

巻頭の写真は地球座第一回公演“青春”の一場面で、ドイツの作家マックス・ハルベの作品を私が脚色した。当時のチラシによると1947・２・25．五日市劇場にてとある。主演の宮嶋好男さんはまだ学生で、衣笠多瑞子さんは、衣笠三姉妹のお一人で後、渡米された。この公演は昼夜２部興業で、ともに満席（注３）の盛況であった。翻訳劇の自主公演は五日市では空前絶後であったようだ。

演劇部はその後、秋川仏教会と組んで仏教劇の賛助出演をしたりした。

音楽部では今のＮＨＫの《のど自慢》の先駆に似た催しを、これも五日市劇場をかりてやり、ＮＨＫ（まだテ



地球座

第一回公演

1 青春 三幕

マツクス、ハルベ 作
西野壽二 菱沼武雄 演出

2 ひばり 二幕

菱沼武雄 作並に演出

高橋繁雄 越沼光雄 高水繁雄 木浦亨律 吉田潤 岡崎好男 小峰森太郎 上田博 ★ 大村岡江 岡野好太郎 國もも子 峯木あけみ 黒田仲 落合八重子 大木太郎 北條 三島賢 秋川美枝子 川崎新

1947 新春二月

（25日 夜6時ヨリ開演）

於 五日市劇場

新農村文化會

會員券 ¥2.50

地球座のうた

にしのひさじ 作詞
きぬがさたきこ 作曲

地球座 地球座
地球はまるい 地球はまるい
世界は一つだ。

手をとれ 手を握れ
兄弟（きょうだい）
姉妹（きょうだい）
世界 世界
世界は一つだ

たちあがれ たちあがれ
舞台はまはる
台はまはる
世界 世界
世界は一つだ

農村文化普及の爲に……
皆様の秋映の使命は重し
◎ 綜敵館の充實せる近代的映畫常設館
毎日 昼の部 一時半 夜の部 六時半開館
五日市驛前
秋川映畫劇場
電話 五日市……100番

レビはない）からピアニストとアナウンサーが参加してくれた。

〔注3〕長い耐乏生活が続いた為、人々は文化に飢えていた。その為、芸術・娯楽関係の催しは各地とも盛況であった（五日市では劇場の他に新しい映画館も出来た）ただ「文化活動を通して一般民衆の自覚、覚醒を促す」という目的意識を明確にしていたところに《新農村文化会》の特色があった。（石井記）

3. 「五日市新政会」の設立

そのうちに文化運動、芸術活動にとどまらず、政治活動もやろうという気運が高まった。その主なメンバーは、山崎竹治郎、高取寛一郎、師岡正孝、星野良一、高木行秀、今川あやよ、宮田格之助、山下新平、作田英夫、それに「新農村文化会」の深沢一彦、犬養謙、橋本延次、奥秋一郎、上田博、西野寿二が加わり、「五日市新政会」という政治団体を結成した。設立趣意書は又しても、私（西野）が頼まれ、会長に深沢一彦、副会長に上田博という「新農村文化会」の正副会長がそのまま推された。

趣意書によると、結成は昭和22年3月となっている。同年4月に行なわれる戦後最初の町長公選が目前に迫っていた。趣意書の表現は文化会と違って一段と厳しい。その概要を述べると、まず戦後改革の不徹底さを強く攻撃し、「敗戦の瞬間まで吾々を圧しつづけていた軍国主義的な専制に対し目をおおい、封建的な権力があらゆる機会をつかんで、その復活伸長を試みようとしている」（文章一部修正）と敗戦への反省が全くみられず、旧態依然としている現状の打破を主張している。

新政会に名をつらねた方は後に地域の政界、実業界で活躍した人が多い。高取氏は都会議員、星野氏は町長、山崎、今川、宮田氏は町会議会、師岡氏は都信連の会長職についている。ところで残念ながら戦後の一時期を風靡した革新の火も正味二か年ほどで衰頽してしまった。その理由は色々あげられるが一つには東京の急激な復興と、それにつれて疎開者の引揚げなどが考えられる。

今40年余をふりかえり、逸早く世を去られた旧友たちに捧げるには、あまりにもお粗末な回顧談となったが、五日市憲法の里に終戦時このような革新の火が点ったことは是非記録に止めておいていただきたい。

あとがき

『五日市町史』の現代編は、当時の町の状況について次のように簡潔に表現している。

「昭和22年、戦後初めての町長公選に町は湧き立ったが、革新系の森谷勇吉氏が選出されたのもこの時代の特徴を浮彫りにした事例であった」と。

実は町長には自他ともにゆるす大物候補者がいたのである。五王自動車社長、石川虎一郎氏で、都下第一の個人バス会社のオーナーであった。石川氏は太っ腹の人情家で、むしろ鷹揚な好人物であったが、風貌はいかにもワンマンタイプで典型的な旧時代人とみなされた。打倒すべき旧時代の標的にされたところが不運といえた。

「五王の虎さん、敗れる」は五日市の人々にとって一種の衝撃を与えた。歓呼した人も多かったろうが、時代の振子のゆきすぎを気遣う人もいた筈である。

実は新政会、新農村文化会運動の衰微原因の中で西野さんが、書かれなかった重要な理由がある。四十余年の歳月を経た現在、これもまた歴史の一コマとして私(石井)の責任において記録させていただく。もちろん西野さんご自身のご承諾を得てのことである。

終戦直後民主化運動の推進に懸命であったＧＨＱ（占領米軍）の方針が急激に変わった。レッドパージが始まったのである。情熱の文学者西野さんは共産党のシンパでもあったから、世間の風向きは占領米軍の風向きに従い微妙に変わってきた。人々は西野さんを敬遠し、一線を画するようになった。町政革新、文化革新の運動はその理論的指導者を自らの手で仲間外れにしたのである。

「新農村文化会」「五日市新政会」の両趣意書を改めて読み直すと、この起草者の目指す社会が「自覚した個人、批判力を持つ個人が対等に連帯する社会」であることがわかる。実は現在のわれわれも、「この社会」を目指して歩みつづけているのであるが、夜明けはまだ遠いようである。

本稿を終え、西野さんは私に語りかけた。

— とにかく五日市の人は私のようなよそ者には、なかなか心をひらいてくれませんでしたね。

— でも、今となってみると、続々と新人が入ってきますし、西野さんなど堂々たる古参住民じゃないですか。

西野さんは初めて呵呵と笑った（石井記）